

Chinnawoot Soonthornsima. *A Macroeconomic Model for Economic Development of Thailand*. Bangkok : Thammasat Univ. Press, 1964. viii + 155pp.

本書は、1963年にミシガン大学へ提出された博士論文であり、タイ国経済に関するマクロエコノメトリックモデルを構築し、それを開発政策に応用することをその目的としている。実行性のある経済開発計画を立案するためには、経済諸変数間の相互依存関係が詳細に分析されていなければならない。そのための一つの方法として、経済開発計画に適した数量的マクロモデルを作ることが考えられるであろう。本書は、タイ国経済に関してそのようなアプローチを試みた最初のものであり、当時進行中であった第一次開発計画（1961～66）が、質的分析、直観、そして時には全くの推測に基づいていることを批判して、より厳密な数量的な取り扱いが可能であることを示唆しようとするものである。

本書の構成を簡単に述べておくと、まず第1章のイントロダクションで、研究の一般的背景、研究の目的・見通し、データ源等に言及し、第2章で非経済的背景を地理的、歴史的、政治的、社会的観点から叙述する。第3章では、一般的な経済条件として、タイ国経済が自由企業経済であることを強調した後、農業、工業、財政、金融、外国貿易、経済開発の諸項目を検討する。さらにそれまでの議論をふまえた上で、第4章においてマクロエコノメトリックモデルを構築し、第5章でその応用、すなわち、財政政策、金融政策、短期経済開発、長期計画のそれぞれに対するモデルの応用を示す。第6章で質的政策と量的政策の関連を略述した後、第7章で全体的な評価を加えている。

本書の構成は以上のようなものであるが、その主目的がモデルビルディングとその開発政策への応用にあるので、この2点について少し詳しく述べておくことが必要であろう。モデルの特徴としては、開発計画の検討を目的としているために、外国貿易、外国からの借款および援助を陽表的に含んでいるこ

と、政府部門と民間部門が明確に分けられていることをあげることができる。モデルは支出面を中心として、貨幣供給函数、生産函数を含む19の方程式（定義式も含む）よりなる部分的な同時方程式体系をなしており、生産函数が実質表示であることを例外として、残りはすべて名目表示の関係式であって、実質GDP（国内総生産）と名目GDPとは物価水準でリンクされている。また、生産函数がラグを伴った定式化であるため逐次決定型の体系となっている。データ・スパンは1952～60の9年間で、決して大標本と言えないが故に、通常の最小二乗法が推定法として採用されている。輸出函数をトレンドだけで説明するというような強引な所もあるが、概して説明力は良好であるように思われる。このようにして推定されたモデルに基づく開発計画の検討は以下のごとくである。まず、人口成長率が3%でありかつ1人当り実質消費が前期より小さくはならないという制約の下で、実質GDPの成長率を6%にするという目標を達成するためには、短期数量的経済政策がいかにあるべきか、すなわち、政策変数（外国からの借款、政府の中央銀行からの借入れ、政府税収入）の可能な値の範囲はどうかの問題についての解が与えられる。さらに、構造変化なしとの非常に厳しい単純化の仮定の下で、タイ国経済の成長モデルが導出され、長期計画における政策変数決定の可能性が示されるのである。

最終的な結論として著者は、統計資料の制約にもかかわらず、計画に役立つマクロモデルの構築が可能であること、本書が開発政策決定の際のモデルの利用法を例示しえたこと、さらに進んだ数量的研究の基礎として本書が役に立つであろうこと、等の評価をあげている。このように、本書が、タイ国経済に関するモデル分析の一つの例であり、データの整備とともにさらに改善され補完される必要のあるものであることは確かなのだが、それにもかかわらず、アイディアに富んだ内容は、タイにおける先駆的試みであるという事実と相伴って、本書を誠に興味深いものにしてしている。また、著者があまりにも質的直観的すぎると批判した開発計画が成功であったという事実も、決して数量的分析の重要性を減じさせるものでないことは強調されてよいであろう。

（江崎光男・東南ア研）